

## Nick Adams 物語の分析的解釈 (I)

### An Analytical Reading of "Nick Adams Stories"—I

鴨 川 卓 博

TAKAHIRO KAMOGAWA

#### 序

Hemingway が真の意味での最初の短篇集 *In Our Time* (1925) に "Introduction by the Author"<sup>1</sup> を付け、更に1つ1つの短篇の前に *interchapter sketches* をつけることによって、この短篇集に一種の統一と秩序を与えようとしたという事実は、この短篇集の解釈に手懸りを与えているものと思われる。なるほど、彼が当初手本にしたといわれている Sherwood Anderson が *Winesburg, Ohio* (1919) で短篇に統一と秩序を与えようとして、一人の新聞記者の青年を語り手として登場せしめた前例はある。又 Hemingway と同時代の Dos Passos が幾つかの物語を並列的に並べる手法を用いており、Edgar Lee Masters の *Spoon River Anthology* (1915) の例を見ても、この手法が必ずしも Hemingway の独創でないことを示してはいる。然し、それにも拘らず、彼がこのような一見極めて無秩序な短篇集に "Introduction" を付け、然も、それが全物語の基調とも言うべき *interchapter sketches* に示されたものと同質であるという事実は簡単に看過されるべきではない。又この短篇集の合計16の物語のなかに8編の Nick Adams 物語を入れ、それらを注意深く Nick の成長年代順に配列し、然も短篇集の冒頭と結末を集中的に Nick 物語にしてあることは、明らかに作者の計画に基くものと考えざるを得ない。尚 *interchapter sketches* も当初 *in our time* (1924) に発表されたのとは相当に順序が入れ替えられており、これも Hemingway の経験の年代順と考えられる。<sup>2</sup>

この様に作者の側から示されている意図ともいべきものを、個々の作品分析の前に検討する必要があるように思われる。先ず "Introduction" と *interchapter sketches* に描かれているものは、全て *violence* (暴力、狂暴なるもの) と、それに打ち拉がれて行く人間 (或る場合には動物) の姿である。死んだ自分の幼児の死体を何時までも諦めようとしない婦人達、荷物用の騾馬を脚を折って港の海中に投げ込む兵士達、これらが戦局不利な為撤退が行われている混乱の最中に描かれているのである。又6人の閣僚が処刑される *scene* であつたり、壁を登って来る敵兵を1人ずつ狙い定

1. 後 "On the Quai at Smyrna" と改題されて *First Forty-Nine Stories* では1つの短篇として扱われている。この短篇集の *interchapter sketches* となっている Hemingway の従軍記者時代の体験の *sketches* と同質のものである。
2. Carlos Baker, *Hemingway; the Writer as Artist* (Princeton, N. J.: Princeton University Press, 1952), pp. 299-300. 及び Philip Young, *Ernest Hemingway* (New York: Rinehart & Co., 1952), p. 2. 参照。

めて射ち落すsceneであったりする。Philip Young の指摘する如く<sup>3</sup>Hemingway がこの短篇集に *The Book of Common Prayer* 中の “Give peace in our time, O Lord.” から取った *In Our Time* という題名を与えたことは、何とも皮肉な命名と云わざるを得ない。然し、この “Introduction” と sketches でこのような平和の無いことと、人間にとって現実の諸相が如何に不条理なるかを示していることは、短篇のみならず、長篇をも含めて、Hemingway の作品解釈に有力な手懸りとなっている。更にこれらの描写において作者の採った、感情を殺した、冷たい眼—視点は、このような現実の姿を伝える vehicle としての作品に登場する主人公の冷静な pose と over-up して、その効果を一層高めている。

## 1

今 *In Our Time* 中の 8 編の Nick Adams が登場する物語 (“Big Two-Hearted River” の 2 つの Part を 1 編と数える場合は 7 編) 及び 6 番目の interchapter sketch より成る Nick の「伝記」に *Men Without Women* 中の 3 編, *Winner Take Nothing* 中の 2 編を重ねると、合計 13 編及び 1 interchapter sketch より成る Nick Adams の成長の記録が出来上る。これらの短篇集にはこの他に Nick の「伝記」を構成するとみられる 1 人称の物語が 3 編含まれており、以下これらを加えて 16 編及び 1 sketch を、Nick の成長の順序に従って読んで行くことにする。<sup>4</sup>

先ず *In Our Time* の最初の作品 “Indian Camp” (“Work in Progress” (1924) in the *transatlantic review*) は Nick の「伝記物語」のうちで最も展型的なものと看做されている。然し、この物語は Nick についてではなく、Nick の父親である医者について多く語られており、扱われている事件そのものも、相当に判っきりとした形をもった事件である。従って、これを特に Nick の成長の記録、「開眼」の物語として読む必要が無いばかりでなく、成る意味では、これを Nick の成長物語の一部として読むことに不自然さを感じるかも知れない。然し、この物語を Nick の父親が行う、医学雑誌に報告する程の、医学上ないし医術上の処置の物語として読んでも、又 [Ojibway] Indian の女の難産と、それを見かねた怪我をしているその夫の自殺の経緯として読んでも、Young の指摘する如く、<sup>5</sup> 物語の結末部は “irrelevant” なものとなる。殊にこの部分における父親に対する Nick の質問である。“Do ladies always have such a hard time having babies?” から “Is dying hard, Daddy?” までの合計 7 つの質問の存在、及びその内容は、この物語における Nick の役割を示していると思われる。即ち George 叔父に関する 1 問を除いて、これらの質問は人間の出生と死—より多く死—についてである。これは、これらが Nick のこれまでの知識では理解出来ない

3. Young, *op. cit.*, p. 2.

4. 物語順序決定については拙稿「Hemingway の短篇に対する一試論」(鹿児島大学教育学部研究紀要 第 17 卷 (昭和 40 年 12 月)) 参照。尚同稿では “Cross-Country Snow” を “Now I Lay Me,” “A Way You’ll Never Be” より前に置いてあるが、これは不適當であるので、逆順に訂正しておきたい。

5. Young, *op. cit.*, p. 3.

「未知の」「不自然な」型のもので、然も、それらが極めてconcreteな事例（存在）としてNickの眼前に起ったので、それについての疑問を解く為の質問である。即ち、この部分では、明らかにNickの物語なのである。更に、極めて“objective”に、何気ない調子で書かれた最後のone-sentence paragraph—“In the early morning on the lake sitting in the stern of the boat with his father rowing, he felt quite sure that he would never die.”<sup>6</sup>—では全くNickのことを述べているのである。然も彼がボートの艫に座し、父親が漕いでいるということは、その直前のparagraphで述べられており、繰り返してである。わずか5頁足らずの物語で、然も4行位前で述べたことを無意味に繰り返す程、Hemingwayが不注意であったり、饒舌であったりするとは考えられない。とすれば、この繰り返しは、作者がその必要を認めたからに違いない。今、この最後のparagraphを取り除いて物語の結末としてみると、その違いが良く判る。即ち、この最後のparagraphが無い場合は、この物語は上述のNickの質問にも拘わらず、客観化されて、焦点がNickから外らされてしまう。この末尾のparagraphは、従って、焦点をNickに合わせる役割を持っていることになる。一旦客観化された焦点を、改めて、その位置を繰り返し説明されたNickに戻すのである。こうして、被保護者、被指導者としての位置を明示されたNickが、この「未知の」事件から学び取った“he felt sure that he would never die.”との確信を抱くのである。

今、この結末部がNickに焦点を合わせたNick物語であることを頼りにして、この物語前半を読む時、視点がNickに置かれており、全てが客観化されてはいるが、その実、明らかにNickの立場から語られていることに気づく。冒頭の文章はNickが早朝camp場のボート置場に立っていることを示している。“At the lake shore there was another rowboat drawn up. The two Indians stood waiting.”<sup>7</sup>この何気なく置かれた“another”という1語は視点を説明するのに充分である。これで、この物語がIndian達の物語としては不自然であることを示している。更にGeorge叔父の乗ったボートは“the other boat”と示され、Nickにはその音は聞えるけれども、霧と暗闇の為に識別することは出来ない。以後物語中で起こる、或は行われることは全てNickの視点で語られており、Nickが目を外らせている間に父親が施すジャックナイフでの手術、その他の処置は具体的には何も語られていない。<sup>8</sup>

一方この物語は父親に対するNickの質問と、父親のそれに対する回答によって、両者の立場の違いも示されている。教師としての父親と、生徒としてのNickである。(尚父親の言う“*How do you like being an intern?*”<sup>9</sup>という言葉も、父親が生徒ないし、見習いとしてNickの立場を意識していることを示している。) 父親は、最後にその産婦の夫が自殺しているのを見て狼狽するまでは、

6. Ernest Hemingway, *The Short Stories of Ernest Hemingway: The First Forty-Nine Stories and the Play The Fifth Column* (New York: Random House, n. d.), (以後 *First 49* と略記) p. 193.

7. *First 49*, p. 189. イタリックス筆者。

8. *Ibid.*, p. 191. He was looking away so as not to see what his father was doing./Nick didn't look at it./Nick did not watch.

9. *First 49*, p. 191. イタリックス筆者。

完全に教師・指導者の立場を維持する。この物語を原始社会における大人の社会への入会の儀式と見る場合には、彼は司祭の役割を果たすことになる。<sup>10</sup>大人の社会への initiation の analogy と見ても、それを Nick の立場から言えば「認識」・「開眼」の過程に他ならない。従って、父親は彼なりに、Nick に彼自身の事物に対する認識を授ける意図をもって、Nick を連れて行ったのである。それ故父親は Nick に、Nick のこれまでの理解を否定して説明する。

“This lady is going to have a baby, Nick,” he said.

“I know,” said Nick.

“You don’t know,” said his father. “Listen to me. What she is going through is called being in labor. The baby wants to be born and she wants it to be born. All her muscles are trying is to get the baby born. That is what is happening when she screams.”

“Oh, Daddy, can’t you give her something to make her stop screaming?” asked Nick.

“No, I haven’t any anaesthetic,” his father said. “But her screams are not important. I don’t hear them because they are not important.”<sup>11</sup>

医者としての父親は Nick が出産を知っていると応ずるのに対して、極めて判っきりと “You don’t know” と否定する。Nick のこれまでの知識は、父親の職業的見地からは全く知識とは言えないもので、いわば童話の世界のものであった。Hemingway がこの物語で出産に関する詳細を述べておらず、視点人物 Nick に眼を背けさせていることは、現実の出産が、Nick にとって、既得の知識と相対立し、両者の調和がはかれなくなった時、既得の理解に逃避する以外に道の無かったことを示している。Hemingway hero がこれを幾らかでも現実相として把握するようになるのは *A Farewell to Arms* の Frederick Henry になってからである。この理解の違いは “being in labor” (分娩中) と “having a baby” (子供を生む) との差である。従って、Nick はこの女の悲鳴が気になる。だが、父親にとっては、彼女の悲鳴は彼女の labor (陣痛) を表わし、お産の前兆で、彼女の全筋肉が胎児を生み落そうとしている証拠なのである。故に、父親にとっては、悲鳴は “important” なことではなく、それ自体では何の意味も持たない。より “important” なことは逆子の為に生ずる “a lot of trouble” に対処することである。上述の説明に次いで為される父親の Nick に対する授業はこのことである。“... babies are supposed to be born head first but sometimes they’re not. When they’re not they make a lot of trouble for every boby. Maybe I’ll have to operate on this lady. We’ll know in a little while.”<sup>12</sup>と落ち着いて説明する父親の態度は、自分の職業的立場を完全に認識し、それに自信を持った人間のそれである。父親が間に合わせの道

10. 元田脩一氏がこの趣旨で勝れた分析を為している。元田脩一、「短篇小説の分析と技巧」(東京: 開文社, 1959), pp. 85-110.

11. *First 49*, p. 190. イタリックス筆者。

12. *First 49*, p. 191. 父親の説明が全体にかなり詳細であることは、Nick が眼を背けていた為に生じた手術そのものの描写の無いことと、鋭い contrast を為している。

具を準備して来ており、手術の必要の有無の判らぬうちに、既に、それらを煮沸消毒するよう手伝いの女に命じていることは、医者として事態の変化に対応すべき知識を持ち合わせており、それに基く適切な処置を取っていることを示している。それ故、手術が終った後、難かしい処置を終えた自分の技術を誇り、「ゲームの後更衣室で意気盛んにガヤガヤ騒いでいるフットボール選手の様に」<sup>13</sup>自分の腕を自慢するのである。

だが、既に述べた如く Nick は父親の医者としての知識、技術の見せ場では、ほとんど眼を背けており、この父親の授業は Nick にとって詳細な有効な「開眼」にはならなかった。恐らくは不愉快な一事件で終る筈であったろう。真に Nick に強烈な授業となったものは、父親の医学的な説明にも抱らず、その激しい悲鳴故に正視するに耐えず、ずっと眼を外らせていた、この荒っぽい「極めて例外的」<sup>14</sup>な出産及びそれに伴う処置ではなくて、その際の産婦の苦痛の叫びに耐えかねて、静かにその夫が首を耳から耳まで切り裂いて、自ら命を絶ったことであった。Nick 自身も彼女の悲鳴にひどく悩まされ、その為父親の意図した授業が妨げられたのであった。こうして悲鳴の齎らした効果は、彼女の夫にも Nick にも或る程度共通である。それ故にこそ物語結末部での Nick の確信が生まれるのである。

この夫の自殺は、常識からも、父親の医学的知識からも、全く考えられない<sup>15</sup>ことであった。父親は狼狽し、Nick を連れて来たことを後悔する。“Take Nick out of the shanty, George.” と自分の荒っぽい手術には立ち合わせておきながら、自分の医学的知識で説明出来ないものを含んでいるこの自殺に際して周章てるのである。I'm terribly sorry I brought you along, Nickie . . . . It was an awful mess to put you through.”<sup>16</sup>とは、全く自信に満ちて手術を行った医者らしくもない言葉である。“Nickie” と Nick を子供っぽい呼び方で呼んだり(この物語中唯一度、Nick を子供として扱うことは、これまでの大人の社会への案内役としての立場を棄てることになる)、“awful mess” と極めて主観的、非科学的な言葉を使ったりする。この時父親は教師・指導者としての資格を失うのである。だが実は、この出来事こそこの日の Nick の最も主要な「学習」・「開眼」なのである。既得の知識で説明のつかない事存在を知ることが、真の意味の「開眼」となるのである。だがそれには十分な motivation が必要なのである。「学習」・「開眼」が効果を挙げるのは、新らしく齎らされる知識の内容が、被学習者の共感を得ている場合である。“Indian Camp” においては、女の悲鳴に耐えかねていた Nick には、同じ立場の夫の行動が極めて強烈に訴えたのである。こうし

13. *First 49*, p. 192. 尚この sport の game での喩えで説明する表現法は Hemingway に多く、これについての John Atkins の見解は正しい。 *The Art of Ernest Hemingway; His Work and Personality* (London: Spring Books, 1965).

14. *First 49*, p. 193. 結末部の Nick の質問で出産に関するものは、これが答えになっているもののみである。父親に「医者の見習いをどう思うかね」と尋ねられて“All right.” と答えるのは、Nick が眼を外らせていた事を前提として受け取らねばならない。

15. *First 49*, p. 192.

16. *Ibid.*

てこの物語の焦点はこの最終の出来事に合わされているのである。物語中で細かく描かれていない手術の傷や出血に比べて、自殺した夫の切り傷や寝台の凹みに溜った血、頭の位置、刃の出ている剃刀等の描写の鮮明なことは、この部分が物語の climax であることの傍証になる。こうして「極めて例外的」な事例によって出生の場に臨ませられた Nick は、生の violence, 父の為す violent な creator の役割を父に教授されると同時に、死の醜悪凶暴な相、冷静で自信に満ちている筈の creator の狼狽も知り、この様な現実相（自然と言っても、社会と言っても十分に言い表わせない、現実存在の姿）への「開眼」・「認識」を為すのである。「彼は決して死ぬまいと思った」という決心（確信）は、この現実相への「開眼」・「認識」を始めた Nick のギリギリ最低線での覚悟でもある。

然し乍ら、“Indian Camp” のこの様な分析は、実は、この短篇1編のみの分析ではいささか唐突とも思われる。この様な分析が為され得るのは、Hemingway の長篇をも含めた全作品を一大長篇と考え<sup>17</sup>主人公の名が如何様に変ろうとも、それを主人公の生涯を示す一代記と看做した時である。この様な読み方は伝記的要素の多い Hemingway の作品にあっては、作者自身の自伝として読まれる危険があるが、この点を警戒すればよい。この観点で Hemingway の作品を読んで行くと、主人公（人間）の発展、成長、学習（認識）の過程とみられる場合が非常に多い。A Farewell to Arms の Frederick Henry は「栄光とか名誉とか」空虚なものを信じないで（その程度にまで認識を高めていた）、敢て自らの既得の知識に頼って “a separate peace” を得ようとして、見事に敗れ、より stoic に自分の立場の確認を繰り返す The Sun Also Rises の Jake Burns の立場に到るのである。太陽の繰り返し昇るこの地球上の現実が「空の空」なることを熟知した上で、自らの無意味を前提にして、尚且つ自己の存在に意義を認めようとした For Whom the Bell Tolls の Robert Jordan は歴史と過去を現在の中に見出し、誰の為にでもなく（何かを信じてではなく）死ぬことが、自己に生きることと悟るのである。こうした長篇の主人公達の生活の規範の根拠となった学習、自己の立場・現実の諸相の認識は Nick Adams 物語を中心とした短篇の中でより多く為されている。長篇での学習・認識と、短篇でのそれに次元の違いのみられるものはあっても、質的な違いは見られない。Frederick Henry の認識の次元から Jake Burns のそれへの移行は、これだけでは余りに唐突であるが、その間に、例えば “Fifty Grand,” “The Undefeated” 等における認識が加われば容易に納得出来るであろう。このような perspective が無くては次の “The Doctor and the Doctor’s Wife” 等は説明がつかず、分析不能となる。

## 2

“The Doctor and the Doctor’s Wife” における Nick の立場は、相当注意深く読んでも不

17. Philip Young, *Ernest Hemingway: A Reconsideration* (University Park: Pennsylvania State University Press, 1966), p. 263. 参照。

明確である。物語の結末部でNickが「木に凭りかかって読書をしている」<sup>18</sup>と描かれていることと、物語冒頭の文と4番目のparagraphの初めで、この医者が“Nick's father”と表わされているのみである。上述のperspectiveをもとに、この2つの手懸りを頼りにこの物語を読むと、物語の初めの部分で“Nick's father”と説明されていることは、Nickとこの物語中主として行動する人物との関係を示すと同時に、この物語の焦点がNickに置かれていることを暗示している。（“Indian Camp”でも“Nick's father,” “his father”と、医者とNickの関係が示されていた。）更に木陰で読書していることは、彼が観察者・学習者としての姿勢をとっていることを示している。又物語結末部においてNickが、それまでの傍観者的立場を捨てて、父親と散歩に出かけることは、前の物語同様Nickがギリギリの所で選択を為し、それ故、彼が物語の中心的存在となることを意味している。物語全体の視点は客観的であるが、Nickの眼と置き換えてみても変わらない。この物語において学習し、認識する事柄は、現実存在としての人間の相であり、作者はNickに物語結末部でその選択をも行わせていると見られる。

## 3

次の“The End of Something,” “The Three-Day Blow”は内容的に繋がっている<sup>19</sup>ものであるが、前者はMarjorieという少女との恋の結末の経緯であるが、物語の大部分は鱒のtrollingに費されている。“It isn't fun any more.”<sup>20</sup>という理由でこの恋に結末をつけているこの物語も、把み所のない物語である。題名によって与えられている解釈の方向も、別離に到る破綻が、格別これという昂まりを見せていない故、ともすれば見失われ勝ちである。我々が作者に与えられているのは、どことなくしっくり行かないNickとMarjorieの会話と、Marjorieが立ち去った後のNickの姿である。Nickが“It isn't fun.”と感じる原因も、動機も示されていない。唯He can't help it.なのである。これは、真剣な積極的な意味を持つのではないこの恋が、思春期のNickにとって、もはや“fun”なものではなく、又何でも知っているMarjorieに耐えられないことを示している。それと共に、Nickが自分の感情の主体性、自主性を持っていることをも示している。然し結末をつけたこの恋はNickの心に空洞を生む。“Nick went back and lay down with his face down in the blanket . . .”とか、別れの感想を尋ねたBillに言う“Oh, go away, Bill! Go away for a while.”<sup>21</sup>等はこの事を示す。この“heart-break”の気持は、Marjorieとのこの恋よりも年少のNickが“Ten Indians”で感じたものとは全く異った意味を持っている。“Ten Indians”ではNickは友人やその父親からteaseされて“hollow and happy”な気持になり、その相手のIndian娘が別の少年とたわむれていたと聞かされて、“My heart's broken, . . . If I feel this way my heart must be broken.”<sup>22</sup>と子供心で失恋を想像する。この段階のNickからはかなり成長し

18. *First 49*, p. 201.

19. 前掲拙稿参照。

20. *First 49*, p. 208.21. *Ibid.*, p. 209.22. *Ibid.*, p. 434. イタリックス筆者。

